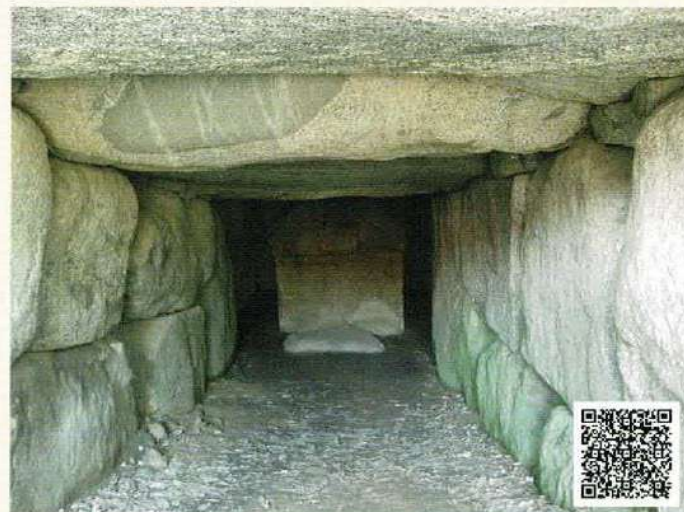


石室が先か石棺が先か？

⑦ 艸墓古墳 (くさはか) (大字谷小字艸墓)



墳形	大きさ	埋葬施設	築造年代	備考
方墳	15~20m以上	横穴式石室	7C中頃	国史跡

安倍山丘陵の西南斜面に位置する南北28m、東西22m、高さ8mの方墳である。墳丘斜面に玉石の露出箇所があり、葺石の可能性もある。両袖式横穴式の石室は花崗岩を用い南東方向に開口し、全長約13m、玄室長4.4m、幅2.7m、高さは2m。石積みは玄室部の奥壁、側壁や羨道部の一部は巨石を使い、1段1石で構成されている。いずれも切石状に加工されており玄室の側壁と天井石の隙間には漆喰が残っている。

玄室には剝貫式の家形石棺が石室主軸に平行して安置されている。石材は兵庫県・竜山産の石で比較的保存状態は良いが、奥側の小口部に大きな盗掘穴がある。尚、家形石棺の前に一枚の置き石があり、墓碑を載せる台ではないかとの説もあるが定かではない。この古墳でよく話題になるのが石室の規模に対し石棺が大きく、いかにして石棺を石室に入れたかであるが、おそらく同時進行で造られた古墳であろう。早くから盗掘され副葬品は不明であるが、石材の特徴から築造時期は7世紀中頃と思われる。



古くから信仰の対象の
⑧ 文殊院東古墳

(大字阿部小字金蔵)



墳形	大きさ	埋葬施設	築造年代	備考
不明	15~20m	横穴式石室	7C前半	県史跡

知恵の文殊で知られる安倍文殊院境内地に位置し、国特別史跡の文殊院西古墳の東100mにあり、1974年に県の史跡に指定されている。別名で閻伽井窟と呼ばれ、羨道部に井戸が掘られている。これは元々古墳の排水溝に水が溜まったのを見て、後世に更に掘り下げ、井戸にしたという説もある。古くから知恵の水などと言われ、信仰の対象となってきた。

古墳の墳丘は後世の改変で明確な墳丘の形は判らない。石室は南南西に開口した両袖式横穴式で全長13m、玄室長4.7m、幅2.3~2.7m、高さ2.6mで羨道長8.3m、幅1.8~2m、高さ1.5mである。石室の開口時期は室町時代に書かれた「実隆公記」により室町時代にはすでに今日と同じ状況であった事がわかる。石室の石材は、玄室部はほとんど加工されていない自然石を用いたものであるが、羨道部は右側壁など一部切石技法による石材が用いられている。内部からの出土遺物は全く知られていないが、築造時期は石室の特徴より7世紀前半と思われる。



終末期古墳をを代表する

⑨ 文殊院西古墳

(大字阿部小字金蔵)



墳形	大きさ	埋葬施設	築造年代	備考
不明	20m以上	横穴式石室	7C中頃	国特別史跡

安倍山丘陵から西北に派生する尾根を利用して造られた古墳で、日本三文殊の一つで名高い安倍文殊院の境内にある。墳形は墳丘東側の等高線が、ほぼ直線を呈する事から方墳の可能性はあるが、大きく改変されており定かではない。南向きに開口する両袖式の横穴式石室は早くから開口し、今は石仏が祀られている。精美な石室として知られ、終末期の横穴式石室の頂点に立つ古墳で、1921年に国の特別史跡に指定された。

石室は全長12.5m、玄室は長さ5.1m、幅2.9m、高さ2.8mで、良質の花崗岩を長方形に加工した石材を5段に互い違いに積み上げ、側壁の一部には一つの石をあたかも2個あるようにした摸刻が認められる。天井部は内側がやや掘りくぼめられた巨石の一枚板である。一方、羨道部は長さ7.4m、幅1.9m、高さ1.9mで側壁は1段積みで巨大な板石を4枚並べ、天井石は3枚という構造である。築造時期は7世紀中頃とみられる。



とみやま
鳥見山周辺の古墳探訪



こうぜ1号墳 (東石室)

～体験しよう！桜井の古墳ワールド！～

桜井市の市街地東南部に位置する鳥見山周辺には大和王権の大王墓の可能性のある桜井茶白山古墳、メスリ山古墳があります。全長200m級の前方後円墳では数少ない墳丘内に入れる古墳で、その大きさに感動することでしょう！

また桜井市は横穴式石室の宝庫で、終末期古墳を代表する「文殊院西古墳」(国特別史跡)をはじめ、当地と宇陀に集中的に築かれた磚積(せんづみ)式の石室を持つ「舞谷2号墳」、県内でも珍しい二つの石室を持つ「こうぜ1号墳」など特徴ある古墳が点在しています。横穴式石室においては、ほとんどの石室に入って見学できるのも、このコースの特徴の一つです。古代のタイムカプセルともいべき古墳の数々を、体験いただければ幸いです。



古墳探訪ガイド

探し難い古墳を
写真地図で紹介！

モデルコース（全行程約10km）



・桜井駅を起点に、およそ10kmのコースです（詳細はマップをご覧ください）。

・雨天時や足元の悪いときは「こうぜ古墳」は見学できません。

の印のついている古墳は、石室の見学時、懐中電灯が必要です。

古墳探訪・・・その前に

日本のはじまりの地、桜井市には、女王卑弥呼の墓ではないかと言われる箸墓古墳をはじめ、大和王権発祥の地に相応しい歴史遺産が数多く残ります。そのような桜井の古墳の中から、桜井駅から気軽に探索できる鳥見山周辺の古墳のうち、特にお勧めの9基の古墳についてご紹介いたします。出かける前に、次のことに気をつけて古墳探訪をお楽しみください。

① マナーを守ろう！

今回、ご紹介する古墳のうち横穴式石室を持つ古墳の多くは石室内に入り見学する事ができます。（文殊院東古墳は石室に入れません。開口部からの見学が可能となります。）古墳は文化財ですが、お墓であるという事を忘れないようにして下さい。又、古墳の殆どが民有地であり、そばに所有者の方や、ご近所の方がおられれば、お声がけしてから入ってください。

② 安全に！

場所によっては、熊笹が生い茂り、道なき道を探索する事もあるかと思えます。くれぐれも安全対策の上、お出かけください。（このコースではハイキングシューズ、軍手、帽子、磁石、懐中電灯、携帯電話等の持参が いいでしょう。）

桜井茶臼山古墳



- ① 跡見橋の手前の川沿いの細道をマップを参考に桜井茶臼山古墳の方向に進みます。
- ② 後円部の入口からしばらく進むと、くびれ部付近にフェンスの無いところがあります。
- ③ フェンス内に入り左10m位の所にあるシュロの木の前横の階段状の道を上ります。

舞谷2号墳



- ① 道路脇の階段（約60段）を上り、少々分かり難い緩やかな上り道を前進します。
- ② 階段から約60m位で開口部が見えてきます。

秋殿南古墳



- ① 矢印の方向に進みます。（目印は聖林寺と学校近しの看板）ここから約120mで到着。
- ② 道なりに沿って民家を通り抜け山裾まで進みます。
- ③ 山裾に向かって右側に進むと古墳の看板があり、その右上に古墳の開口部が見えます。

こうぜ1号墳



- ① 桜井中学校前の交差点を、鳥見山の山裾に向かって歩きます。
- ② 突き当りの少し手前を擁壁沿いに左に曲がります。
- ③ 約20mぐらいまで進むと竹藪が見えてきます。この上に「こうぜ古墳」があります。
- ④ 急な坂を気を付けながら登ると1号墳（東石室）の開口部が見えてきます。西石室は左20mの所にあります。（注）雨の日や足元の悪い時の見学はやめましょう

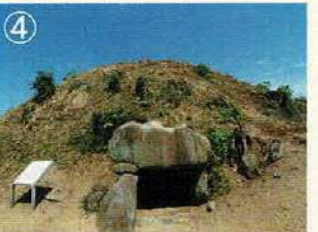
メスリ山古墳



- ① 高田会所を通り抜け奥に進みます。
- ② 八坂神社の階段を上ります。（実は、ここは後円部の一部です。）
- ③ 拝殿の右横に、少し分かり難いですが後円部に行く道があります。
- ④ 頂上に着くと写真のような横穴式石室があります。

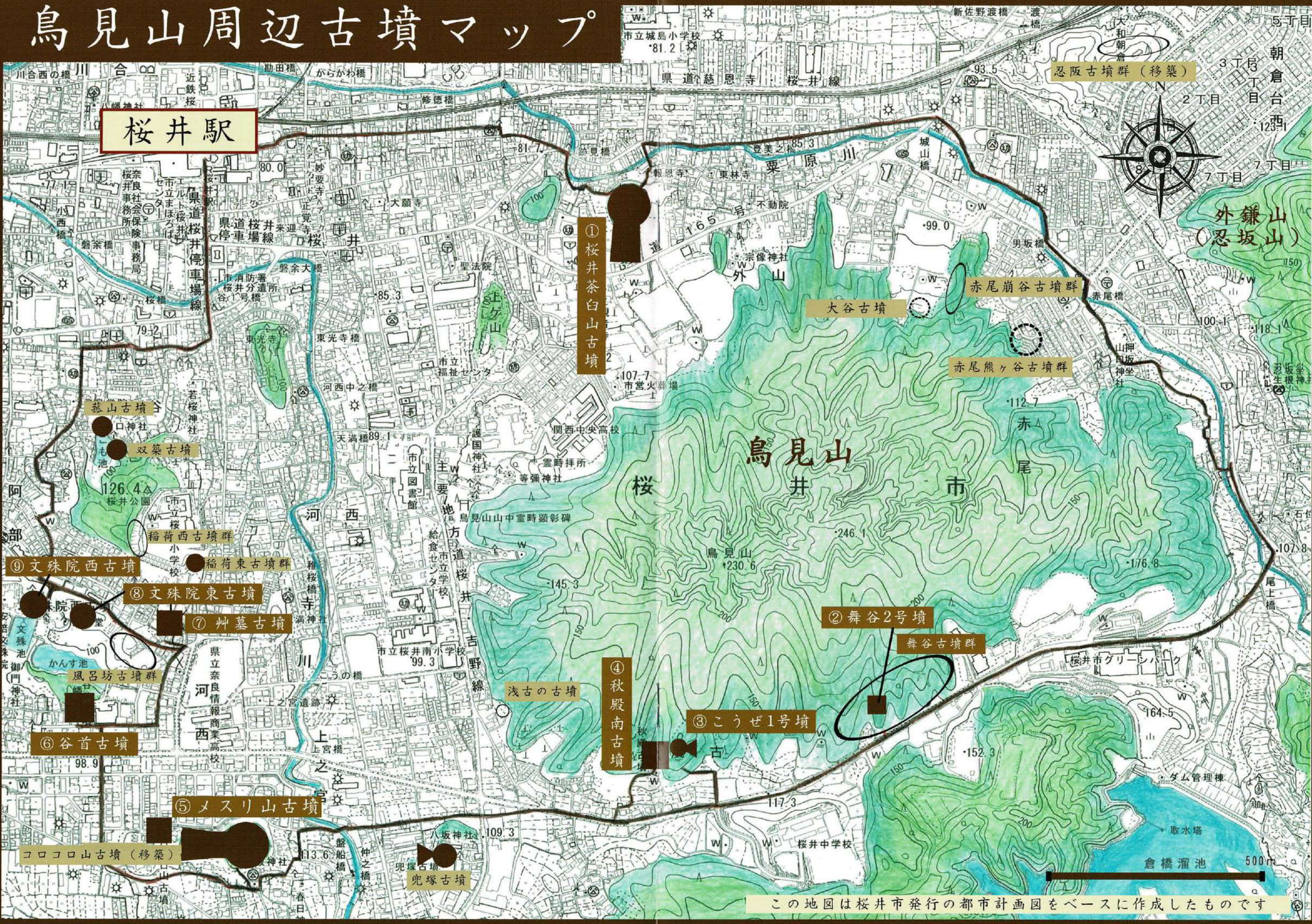
※前方部は畑地などが多く見学はご遠慮ください。

艸墓古墳



- ① 交差点を矢印の方向に進みます。
- ② 行先表示の通り進みます。
- ③ 少し、分かり難いですが、表示の通り民家の間の細い通路を通り過ぎればすぐ左に古墳が見えてきます。
- ④ これが開口部です。

鳥見山周辺古墳マップ



この地図は桜井市発行の都市計画図をベースに作成したものです

ヤマト王権の大王墓とも指摘される

①桜井茶白山古墳 (大字外山)



墳形	大きさ	埋葬施設	築造年代	備考
前方後円墳	全長約200m	竪穴式石室	3C後半	国史跡

鳥見山から北にのびる尾根の先端を切断し、築造された大型の前方後円墳で、全長約200m、後円部径約110m、高さ約24mの墳丘規模を持つ。1945・50年に後円部中央の埋葬施設の調査が行われ、内面を水銀朱で塗布された竪穴式石室に納められたコウヤマキ製の割竹形木棺が確認された。木棺は原形を失っているものの、遺存していた底部分は、長さ4.9mと長大なもので、副葬品として王の権威たる玉杖や玉類・剣等が出土した。

2009年に行われた再調査で、石室を囲む神聖な空間として区画したと思われる「丸太垣」の痕跡が発見され、大きな話題となった。丸太垣は、この古墳の後に造られたメスリ山古墳の埴輪列の前身と見られる。200m級の古墳の多くは宮内庁が管理し、発掘調査例もほとんどなく、貴重な調査事例となった。調査終了後埋め戻しされているが、数少ない全長200m級の見学可能な古墳であり是非、そのスケールの大きさを実感していただきたい。

珍しい磚積式の古墳を見るなら

②舞谷2号墳 (大字浅古小字舞谷)



墳形	大きさ	埋葬施設	築造年代	備考
方墳	10.6×9m	横穴式石室	7C中頃	

舞谷古墳群は、鳥見山の南山麓の小さな尾根上に、1尾根に1基ずつ築かれた東西に並ぶ5基からなる古墳群である。全て方墳で石室は、榛原石の板石をレンガ状に加工し、漆喰で固めながら積み上げて造られた磚積式の石室である。

唯一見学できる2号墳は、墳丘規模が東西10.6m、南北9m、高さ2.5mの長方形で、墳丘中央部に、南に開口する横穴式石室をもち、全長4.4m以上、玄室長2.4m、幅1.35m、高さ1.7mである。羨道部は半壊し、現状は、長さ1.7m以上、幅1.1mとなっている。石室構造は奥壁と左右の側壁から少しずつ持ち送りし、天井の断面は家型の寄棟造りになっている。漆喰は、かなりの部分が剥落しているが、元々は全面に塗布されていたと思われる。5つの尾根に、連続して築かれた他の4基も、磚積式石室を採用した同一集団による墳墓で、早くから開口しており、副葬品は残っていないが、古記録には石の扉があったとある。築造時期は7世紀中頃と考えられる。

前方後円墳に2基の石室を持つ

③こうぜ1号墳 (大字浅古小字こうぜ)



墳形	大きさ	埋葬施設	築造年代	備考
前方後円墳	全長約50m	横穴式石室	6C後半～末	

こうぜ古墳群は、鳥見山山頂から南にのびる尾根の南端付近に築造された古墳群で、1号墳は全長約50mの前方後円墳、2号墳、3号墳は小規模な円墳の可能性が高い。

1号墳は、複数の石室を持つ前方後円墳として、畿内で7基、大和で3基しかない資料的価値の高い古墳で、2基の石室が、隣接して築かれている。共に両袖式石室で、石積みは奥壁が3段、側壁は4段ないし5段で構築し、石材は西石室がやや大きめの石材で若干の加工痕が認められるが、大きな違いは見受けられない。2基共、石室内に多量の土が入り込んでおり本来の玄室の高さは3mを優に超えるものと思われる。築造時期は石室の形態から、前方後円墳の最終末期である6世紀後半～末と考えられる。東石室、西石室共に開口部は狭いが、石室内まで見学可能な古墳である。

鳥見山南麓の巨大方墳

④秋殿南古墳 (大字浅古小字秋殿)



墳形	大きさ	埋葬施設	築造年代	備考
方墳	一辺26m	横穴式石室	7C前半	

鳥見山から南に派生する一尾根の先端南斜面に築かれている一辺26m、高さ5mの方墳。両袖式横穴式石室は、南に開口し全長11.2m、玄室長4.5m、幅3m、高さ2.4mである。花崗岩の巨石を用い、奥壁は2段、両側壁は下段3石、上段2石で切石状の石材が使われている。羨道部は長さが6.6m、幅1.7m、高さ1.4mで側壁は切石の一枚石が3石並べられている。

明日香村越の岩屋山古墳の石室に近い、いわゆる「岩屋山式」の構造であるといわれているが、岩屋山よりやや先行する要素がみられる。早くから開口しており副葬品や棺等は不明であるが、石室の特徴から7世紀前半代の築造と考えられている。この古墳から同一の尾根を奥に進むと「秋殿北古墳」とよばれる古墳がある。今は墳丘中央が陥没中の様子はわからないが、昔は石室が開口していたようで1938年に書かれた「桜井の史跡」には「羨道崩壊し玄室のみ現存せり。その奥行4.2m、高さ1.45mあり」と記されている。

巨大円筒埴輪と鉄製武器類出土で知られる

⑤メスリ山古墳 (大字高田小字メスリ他)



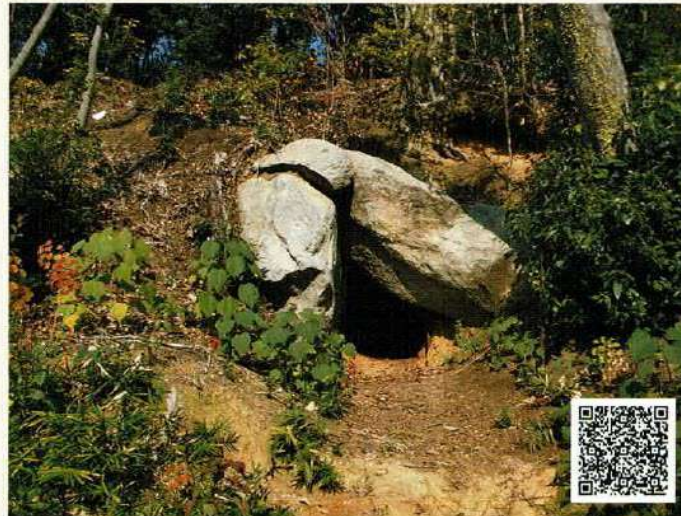
墳形	大きさ	埋葬施設	築造年代	備考
前方後円墳	全長224m	竪穴式石室	4C前半	国史跡

安倍山丘陵の尾根筋の南端に位置する全長224mを超える前方後円墳。前方部側の丘尾を削り、後円部を盛土した3段築成で表面には人頭大の葎石が施されているが、周濠は持たない。1959年と60年に行われた発掘調査で、後円部の中央に墳丘主軸に直交する形で大型の円筒埴輪が、埋葬施設直上の方形壇の周囲を二重にめぐっていることがわかった。

要所に置かれた特殊円筒埴輪は径1m、高さ2.4mを測る日本最大のものである。埋葬施設は被葬者が眠る主室と、その東に副葬品のみを収めた未盗掘の副室がある事が判明した。主室は盗掘されていたが、鏡・玉・剣などが、副室から6本の銅鏃をはじめ、鉄鏃、鉄製の弓矢、刀剣など多量の鉄製武器類が原位置のまま発見され、その資料的価値は極めて高く、2005年一括して国の重要文化財に指定された。現在、これらの出土品の一部は、橿原考古学研究所附属博物館で見ることが出来る。磐余地域の前期古墳として最大規模を誇る4世紀前半の王墓とも考えられる古墳で1980年に国史跡に指定された。

阿倍氏の墳墓か？

⑥谷首古墳 (大字阿部小字谷汲)



墳形	大きさ	埋葬施設	築造年代	備考
方墳	一辺40m	横穴式石室	7C前半	県史跡

安倍山丘陵の南端に築かれた一辺40m、高さ8mの方墳である。古墳の西側に八幡神社が鎮座し、墳丘の西側は改変されている。埋葬施設は南に開口する両袖式の横穴式石室で全長は13.8m。玄室長は6m、幅2.8m、高さ4mと天井の高い形式である。奥壁は巨石を2段に積み、左右の側壁は3段で構築され基底石を垂直に立て2段目、3段目を同じ角度で持ち送りし3段目に低い石が使用されているのが特徴的である。奥壁、前壁も同様に持ち送りされているが玄室全体として持ち送りは少なく、その大きさに圧倒される。

羨道部は向かい合う両側壁をほぼ同じ幅に4石を一段に配しており、岩屋山式石室の前段階の形態と見てとれる。天井部は玄室が2石、羨道が4石で架構されている。早くから開口しており、出土品は不明であるが、石室内には礎が敷かれており、凝灰岩の細片が残っていたことから、家形石棺があったとみられ、築造時期は石室の特徴から7世紀前半と思われる。